選評

シグニスジャパン顧問司祭 晴佐久昌英

桜色の風が咲く

映画は、光と音でつくられている。 したがって、その両方を失った人物を主人公にした作品を つくることは、映画作家にとっては究極のチャレンジになるはずだ。 光と音のない世界を生きる 人間の真実を、光と音を用いて表現するとはどういうことなのか。

松本准平監督はこれまでも、最も困難な状況にある人間を描いてきた。そこになおも救いがあり、映画はその救いを語りうると信じているからだ。その監督が今回、『桜色の風が咲く』において最難関のテーマに挑み、目には見えない光を撮ってくれたことに感謝したい。

体の苦痛も心の苦痛も、誰かとつながっていれば耐えられる。であれば、誰ともつながれない孤独こそは、最大の苦痛であろう。現代人が抱える苦悩の本質は、そこにある。目が見えてい ても、耳が聞こえていても、誰ともつながっていないという孤独。しかし見よ、闇と無音の虚空に 放り出された者に、母の手が触れてくる。 指でことばを伝えてくる。 人間にとって最も大切なもの、すなわちぬくもりのあることばを肌で聞くという、信じがたく美しい瞬間! 実はそれは、映画そのものの美しさとも深い関わりがある。観客もまた、映画館の暗闇の中に独りで座っているのだから。

いつだって救いは、向こうからくる。神の愛の現れであるキリストが自らを「神の指」になぞら えたように、愛するわが子に触れる母の指はそのまま神の指なのだ。この映画自体もまた、絶望 の世紀を生きる多くの人の心に直接触れてくることだろう。「映画は人を救えるか」という監督自身の祈りにも似た問いに、日本カトリック映画賞をもって答えたいと思う。

荒野に希望の灯をともす

貧困と飢餓、戦争、環境問題。 地球上の諸問題について、多くの人はすでにあきらめている。 最大の問題は、そのあきらめ自体であることに気づかずに。 そんな世界に、中村哲という「あきらめない人」が確かに存在したという事実は、全人類の希望である。中村哲の遺言のようなこの映画に「日本カトリック映画賞・平和賞」を授与し、特に道を求める若者たちに荒野へ向かう勇気を贈りたい。

SIGNIS JAPAN (カトリックメディア協議会)
事務局 〒107-0052 東京都港区赤坂 6-12-42 女子パウロ会
電話 81-3-3479-3041 ファックス 81-3-3479 3044 https://signis-japan.org/
連絡先 メール info@signis-japan.org